
獏

Mr.あいう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

獺

【Nコード】

N7583H

【作者名】

Mr. あいう

【あらすじ】

俺は突然獺に夢を食べられた！だが、それも夢で・・・

「やられたっっ!!」

これが、朝起きた俺の第一声。

自分の声で目が覚めた。

さて、どんな夢だったか、まだ頭がぼんやりしてるうちに思い出そう。

回想開始・・・

「どうも、猿です」

「はあ・・・」

「いただきます」

「はあ・・・ってえ!」

「メキヨメキヨモリモリモリグッシャ」

「あああああ・・・」

「ゴクン」

・・・俺の深層心理はこうなっているのだろう。
なんだこの夢は。

まだポヤッとしている目で辺りを見回す。

うっかりコタツで寝てしまったらしい。

コタツの上には札束とみかんが置いてあって、
TVでは蛇にかまれた芸人が必要以上に・・・

・・・え、札束？ウソン？

見間違いで無くそこにある札束。
なんで？何かの陰謀？政府の策略？
ああ、そうか、まだ夢の中にいるらしい。

「ええ、そのとおり」

いつからか、コタツの対面に、獺。

「では、いただきます」

「え？獺さんちよつちよとまつ」

「バッキバキバキギシャギシャ」

「あああああ・・・」

「ゴクン」

「二度目だっっ!!」

またも自分の声で起床。

いや、正確には起床してなかったんだが。

とにかく目が覚めた。壁には何の予定も書き込まれていないカレンダー

うん。いつもの我が家だ。

うん？何か料理のにおい、台所からだ。

なぜだ？ホワイ？

・・・はっ、まさか置きっぱなしのコンビニ弁当が化学変化を起こしたか！

急いで飛び起きその惨状を確認しようと台所へダッシュ！

そしてそこにあったのは・・・

「あ！あなたおはよう！ご飯出来てるわよ。今日はパンにバター？それともジャム？それとも・・・ワ・タ・シ？」

夢のような光景だった。

と言うか、夢だろ。これ。

どっちかっていうといい夢だが、ほぼ確実にいい所で終わってしまおうと思わせぶりの悪夢だったりする。

「その通りでしゅ、モグモグ」

俺の分であるはずの飯を、何のためらいも無く食べる、獺。

「ひどい、私を夢だなんて」

声に出てたらしい、キッチンで泣き崩れている俺の嫁（仮）。

「そうですね、こんなひどい亭主は、食べてしましましょう」

「ええ、お願い獺さん」

「ちょ、何でお願いしてるの。ば、獺さんも待って・・・」

「チュルチュルズルズルゾー」

「吸うなやああああ・・・」

「ゴクン」

「吸われたっつ」

自分の声で以下略。

ここはどうやら何かの執務室らしい。

いすに座って寝ていたようで、秘書っぽい美人がやたら顔を覗き込んでくる。

「首相、どうされました。顔色が悪いようですか」

「ん、いや、なんでもない」

しかし、ここまであからさまな夢は初めてだ。
ここはひとつ、なりきってやろう。

「で、なんのようだね」

「はい、今日の予定ですが、8時12分朝食会があります。そして8時36分から外務大臣と今後の外交政策について会議があります。そして10時2分、ローズマリンホテルで記者会見そして……カ大使館の晩餐会に顔を出します。以上が、今日の予定となっております」

「……なげえ……」

「そうですね、まあこんなもんですって」

と、なぜか秘書のメモをのぞきこんでいる、獏。

「ホント、神出鬼没だな、獏」

「では首相、朝食会へいきましようか」

「いや、今日は予定全部パスだ、六本木へ飲みに行きたい」

「はあ……獏さん。お願いします」

「お願いされましよう」

「また？なあ獏、一回ぐらい融通してくれたって……」

「ゴックンゴクリゴクリゴキュ」

「俺を飲むなあああ・・・」

「どうやったんだああ！」

自分の以下略

起きた場所は・・・女湯？

「キヤアアアア！！！！変態！！！！」

「何の冗談だあ！」

「ええ冗談です。面白かったですか？」

裸の女に混じり、一人にこやかな、猥。

「見ての通り笑えねえ！」

「猥さん、こんな変態、早く食べちゃって！」

「まておまえら、猥も多分オスだぞ。いいのか」

「あんたは猥のメスに欲情すんのっ！」

「うぐっ、正論。な、なあ、猥。もうやめに・・・」

「カリカリカリカリカリカリカリカリ」

「ものすごいスピードでかじられていくぅぅ・・・」

「リスか！貴様！」

自分以下略

ここは・・・あれ？落ちてる？え、空なの？

「あああああああつつつつ・・・」

「おお、いいスピードで落ちてますね」

（俺から見ると）さかさまで落ちていく、猿。

「早く！地面と一体化しちゃうから！平べったくなるから！食べて早く食べて！」

「おお、やっとあの良さがわかってきましたか」

「早くぅぅぅ。おうちるるる」

「はあ、仕方ないですね」

「パクッ」

「あっさりしてるぅぅ・・・」

「危ねえよ！」

どうやら、ホントに自分の声で起きたらしい。

まごう事なき俺の部屋だ。
そして、枕元に、獺。

「・・・もう慣れたよ・・・」

「そうですか、結構なことですよ」

「で、結局何がしたかったんだ、獺」

「当然あなたの夢を食べに来たんですよ、獺ですから」

ああ、そうだ、思い出した。

俺は、大学に行く夢諦めて、毎日毎日朝起きたら金が入ってこないかとか美人の嫁が家にいないかとか、そんなくだらないこと考えて、毎日を浪費してたんだった。

「だから、そんな夢見られないように、食いに來たのか」

「ええ、実際叶いっこないような夢って、意外とおいしいんです。じゃ、ご馳走様でした」

そういつて獺は、きちんと玄関から帰っていった。

確かに、夢なんて叶いっこない。

その夢を目標として、全力で努力しない限り、

そうじゃないとただ、空しいだけだ。

さて、俺もそろそろ目標に向けて頑張るとするか。

「あ、また食いに來ますね、夢」

「二度と来んでいい!!」

(後書き)

100%コメディーで書いてみました。
わかりにくい部分もあるかもしれませんが、
笑ってもらえたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7583h/>

獏

2010年12月23日02時31分発行